薄倖の街

生島治郎

薄倖の街

薄倖の街

定価五〇〇円

昭和四十六年七月一日　印刷
昭和四十六年七月十日　発行

著者　生島治郎

発行者　山越　豊

印刷　三陽社

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

©一九七一　検印廃止

目次

薄倖の街　5
うたかたの唄　83
虫喰いの日々　123
フーテン・マミイ　165
悪女のワルツ　193
あとがき　237

裝幀　栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小説集

薄倖の街

薄倖の街

タクシーのシートに背をあずけながら、古城裕は、次第に濃くなってゆく窓外の夕闇をじっとみつめていた。

タクシーは虎ノ門をぬけ新橋に向って走りつづけている。

両側の舗道には、この辺の官庁や会社のビルから吐きだされた人々が、列をなしてぞろぞろと地下鉄の方へ歩いていくのが見えた。

彼らは濃くなってゆく夕闇の重さに耐えかねたように背をこごめ、いずれも疲れきった表情を浮べていた。

(なんという活気のなさだ)

眉をひそめ、古城はひそかにつぶやいた。

(まるで、死人の行列じゃないか……)

そう、たしかに彼らには活気がなかった。一日の仕事に精気を吸いとられ、ただ、家路へと急ぐぬけ殻にすぎないかもしれなかった。しかし、なによりも、彼らは古城とはちがう人種だった。彼らは朝早く起きだし、夕刻までの間に活力をつかい果してしまう。たとえ、それが終日デスクの前

でぼんやりしているような仕事でも――いや、そういう仕事であればかえって、仕事が終ったあとの疲労ははげしい。彼らはいわば昼間の人種であり、それにひきかえ、古城は夜の人種だった。

夜七時――古城にとって、仕事はいまはじまったばかりだった。

そういう古城の眼からみれば、昼間の人種は生命を失った屍体であり、周囲にそそりたつビル群は陰気でひっそりした墓標にすぎなかった。通りに面した店舗の灯やネオンも力ないまたたきをくりかえしているようにしか見えない。

ところが、車が新橋を過ぎ、土橋にさしかかると、古城はいま目ざめたばかりの街の息吹きをありありと感じた。

眼の前には、濃い紫色の夕闇の中で、華やかに息づきはじめたネオンの列があった。それは、しっとりとした肌に充分に化粧をこらし、自信を持って鏡の前に立ってにっこり微笑(ほほえ)んでいる女のように見えた。

古城が忘れることのできない女。なにもかも知りつくし、なんべんも愛想をつかしながら、それでも別れられなかった女。宵の口のこの一瞬だけは、誰よりも活々と愛らしく、小生意気で、手に負えない女。

眼の前にある街――銀座は、古城にとって、そんな女に似ていた。

土橋を渡り切ったところで、古城は車から降りた。

店まで、まだかなりの距離があったが、彼はこの時間の銀座を歩いてみるのが好きだった。それは、彼に、いつでも、初めての逢いびきのような新鮮なときめきと、猟場にふみこんだ猟師の緊張

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を感じさせる。

舗道に立って、煙草に火を点けると、彼は銀座通りを眺めやった。烟を避けるように細められた眼に、値ぶみをし、たしかめ、穴場をさぐる鋭い輝きが宿っている。

今、彼が立っているのは銀座八丁目にあたり、そこから、六丁目にかけての表通りは俗に電通通りと呼ばれていた。そして、この大通りをはさんだ両側にバーやキャバレー、クラブが群がっている。その数は五千店をほんの少し欠けると云われているが、選りぬきのホステスをかかえ、選りぬきの客を集められるのは、その中でも、百店に充たない。ほんのひとにぎりの店だけが、銀座の中で一流の名にふさわしかった。他の店は、その一流の座めがけて血みどろの努力を重ねているにちがいなかったし、また一流の店はその座を守るためにどんな手段を弄することもいとわないにちがいなかった。

銀座は今や、かつてのような鷹揚で優雅な遊び場ではなく、どうしてライバルを蹴おとし、自分がのしあがるかと絶えずあい争っている修羅場と化している。

そして、そのはげしい生存競争の谷間にこそ、古城たちの存在価値があり、生き甲斐があった。

社用化した銀座の客たちが足を向けるのは、独特の味わいや格式を持つ店ではなく、たいがいが虚名と美人で手練のホステスをそろえている酒場だった。彼らがそこで酔うのは酒でではなく、一流のクラブへ出入りできるという虚名と、美人のホステスに対する直接的な欲望なのである。

したがって、まず一流のクラブにしたてあげるもっとも近い道は美人ホステスをスカウトして揃えることになる。ところが、最近では、どの店もが血眼になって、ホステスのスカウトに狂奔した

結果、ホステスたちの日給や、俗にバンスといわれる前渡し金が法外な額になり、それが銀座の店の首をしめつけていた。

どの店の経営者もそのことに頭をなやまし、ホステスに給料を払うために自分の店がつぶれるのではないかと薄氷をふむ思いをしながら、それでも、ホステスを他店にひきぬかれ、客足が遠のくのが怖いばかりに、歯を喰いしばってスカウト合戦をつづけている。一流の店を、しかも、何軒ものチェーン店をもつ資本の大きい組織化されたところでは、このスカウト合戦にそなえて、何名か、ときには、何十名かの専属のスカウト係を置いていた。

古城裕はそのスカウト係の一人である。

『ラ・ボエム』『ベラミ』『愁』と三つの一流クラブを経営する暁企業に彼は所属していた。

彼は名刺を二種類持っていて、そのひとつにはこう書いてある。

「暁企業株式会社、営業部、人材開発課主任」

もうひとつの名刺の肩書はこうだった。

「クラブ『ラ・ボエム』、クラブ『ベラミ』、クラブ『愁』支配人」

この二つの名刺を彼は、相手によって、使いわけた。しかし、実際に、彼のやっていることは、女を狩り集める狩人の役目だった。この銀座という猟場には、彼と同じような狩人たちが、何百人と眼を光らせている。彼らは、どの店にどんな種類のホステスがいるか、どこのホステスがどこへうつりたがっているか、あるいは、どんな新入りが自分たちの網にひっかかってくるか、絶えず見張っているのだった。

その狩人たちを出しぬいて、自分の店にすばらしい獲物を狩りとってこなければならない。それは刻一刻と神経をすりへらす戦いだった。そう思うと、古城はいつでも、ほとんど絶望的な疲労感にうちのめされるのだが、それでも、この猟場へ来て、銀座の息吹きを感じ、そこここに光るライバルたちの眼を意識すると、あらたなスリルと緊張を覚え、狩人としての本能が身をひきしめるのだった。

古城はゆっくりと歩きながら、煙草をくゆらせていた。信号が赤になり、それを待っている間に、短くなった煙草をすて、なにげなく、あたりを見まわした。

すぐ横に、あきらかに水商売だと思われる化粧の濃い女が立っていた。化粧のうまさと着物の着こなしから、少なくとも五年以上の年期が入っていることがわかる。

彼女は古城の視線を感じたのか、ちらと彼の顔に視線を返し、すぐに興味なげに他へそらせた。ほっそりした白い右手がさりげなく肩にかけたミンクのストールを押えている。

(誘ってやがるな)

内心苦笑しながら、古城は知らんふりをした。

向うは古城の顔を知らないだろうが、彼の方ではこの女の素性をよく知っていた。

女の本名は村井明子、年齢は二十六歳である。明美、美也、メイというような名をつかって五店のクラブをわたりあるいた札つきの女だった。

一時は小さいながらも、自分の店を持ったこともあったが、売りかけ金がうまく回収できず、そのためにヤクザをやとったことからそのヤクザと深い関係になり、結局、その店もつぶしてしまった。あとはそのヤクザのヒモを食わせるために、ホステスとしてつとめはじめ、前渡し金や集金をごまかしてはドロンする常習犯になり下った。

こういうホステスを、古城たちスカウト係はヤクネタといって敬遠する。

いくら美人であっても、客あしらいがうまくても、こういう女には、今までにこげつかせたバンスや売りかけ金が何百万という負債になってついてまわっている。うっかり、ホステスとして採用しようものなら、その負債がそっくり自分の店にかぶさってくるのだ。たとえ、どんなに売りあげをあげてもらったところで追いつく額ではないし、いつヒモと一緒にドロンをきめこむかわからないから、しょっちゅう目を光らせていなくてはならない。

スカウト係としてはまことにやっかいきわまるホステスなのである。

この村井明子のような札つきホステス——つまり、ヤクネタについては銀座の店同士の情報交換でブラックリストができあがっているし、また、一流のクラブなら、それぞれ独自のブラックリストも作成してある。写真はもちろんのこと、身長や趣味、容貌や化粧の仕方の特徴、ドレスや着物の好みや柄までが記入してあるし、ヒモのことについても、蒸発する手口についても詳しく書き入れてあった。

古城はそれらのブラックリストに記入してあることをすべてそらんじていた。スカウト係としては、ヤクネタをつかんで、店に迷惑をかけるぐらいぶざまなことはない。なによりも、そんな女と

知らずに手を出したということは、古城のようなプライドのたかいスカウト係にとっては致命的な恥だった。

（それにしても、もったいないな）

無関心をよそおいながら、ちらちらと視線を投げかけて誘いをかける村井明子の様子を眼の隅で観察して、古城はひそかにつぶやいた。

（あんなたちのわるいヒモさえついていなければ、この女も今頃は一流のホステスとしてどのクラブからもひっぱりだこだったろう。実際、ヤクネタにかぎって、いかにもこっちが咽喉から手がでそうな良い女が多いからな……）

一流のホステスの条件は、美人であることが第一ではない。もちろん、美人であるに越したことはないが、お人形じみた美しさだけでは、所詮二流どまりのホステスで終ってしまう。その女にしかない魅力、――その点に関しては、どの女にも負けない光り輝くものが備わっていなければ、永い期間、うつり気な客の多くをひきとめておくことはできないのだ。

銀座で一流といわれるホステスや、マダムとなって一軒の店を仕切るようになった女には、そんな魅力がそなわっている。彼女らのすべてが決して美人とはかぎらないが、どこかに他の女にはない才能のきらめきを持っている。そして、彼女たちはただ美人だけが取得の女をホステスとして、あるいは、ヘルプとしてつかっているのだ。

スカウト係には、女の中にひそんでいるそのきらめくものを、まだ埋もれているうちに発見するという欣びがあった。名のとおった、すでに一流のホステスをスカウトするのは、札束さえ積めば、

素人にもできることだ。それよりも、まだ誰にも知られていない金鉱を自らのカンで掘りあて、自分の店で磨きをかけさせ、やがてその女がホステスとして一流にのしあがっていくのを観察しているぐらい楽しみなことはない。

少なくとも、古城はその歓びのために、スカウト係をやっているといってもよかった。

ところで、村井明子のようなヤクネタにもそういうきらめきを備えているものがしばしばいる。そうでなくては、眼の肥えたスカウト係がひっかかるわけもないし、莫大なバンスや売りかけ金がからんでくるわけもない。ホステスをしぼるヒモも、スカウト係と同様、かせげる女にしか眼をつけないのだ。

ヒモにヤクザがついているからといって、必ずしも、そのホステスがヤクネタであるとはかぎらない。店に迷惑をかけるようなことをしないかぎり、ホステスがどんな男と同棲していようがさしつかえはなかった。むしろ、ヤクザのヒモを持っているホステスの方が、遅刻も少なく出勤率がいいということもある。ヒモが金ほしさに、女の尻をひっぱたいて一日も休ませず、せっせと売りあげにはげませるからである。こういうヒモつきの女なら、店はむしろ大歓迎だった。

困るのは、村井明子についているサルベージ屋（貸金取立て業）まがいの仕事をしているヤクザである。彼らはチンピラではなく、たまに大金が必要になるから、女がまともにかせいでみついでくれる金では足りなくなり、しばしば、女に店を転々とさせてバンスを借りたおし、あるいは集金のまとまったところで蒸発させるという手をつかう。

こういう悪質のヒモのついているホステスからは、たとえ、蒸発した行先をつきとめたところで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com